読者文壇

本田　良寛

釜ヶ崎無宿うた

一、ながいたび　アホと言はれてヤボすがた
ころがりこんだ生きヂゴク
びんぼぐらしの　オヤがいた
びんぼぐらしの　オレがいる
吹かれ木の葉が　ころげてくずお
氣宿もので　なみ想い
なぜに弱くか　釜ヶ崎

二、みだれがみ　ひとりの女くぐれ雨
人形かかえた　ひとりごと
すわてくらした　オヤがいた
すわてくらした　オレがいる
うすいなさけを　心で切って
意地をすてたら涙をかれた
在り酒のた　釜ヶ崎

三、はなれもの　みなに合はぬと村八分
ゆくえさだめぬ浮せぐも
新いくらしの　オヤがいた
淋いくらしの　オレがいる
のたれ死にする　その与もないが
ドタマなぐられ　あり金とられ
ワルが飛出す　釜ヶ崎

四、ひとりぶは　夢も生れぬ借りブトン
女そはれぬ　せまいへや
だれか分らぬ　オヤがいた
だれか分らぬ　オレがいる
アンコごとが　めしのたね
三日やったら音まで　そまる
バクチ　遊ばた　釜ヶ崎

五、ゆくはては　いったことないあのせだが
ヂゴク　ゴクラク　えんがない
無縁ぐらしの　オヤがいた

笑殺ぐらしの　オレがいる
回向のたすけ　一杯げなか
ナムアミダブツ　釜ヶ崎

五三・一二・一六

俳歌・一日の労苦

田坂　雅一

午前五時　足どり重く　センターに
いきたくもなし　死にたくもなし

手配師は　敵か味方か　知らねども
車中八人と　なりし二のわれ

現場にて　汗水たらして　働けど
もらうお金は　雀のなみだ

現場より　帰りて来れば　酒を呑み
タビの裏見せ　穿わし人かも

ひじ枕　今百姓の　アスファルト
人の情より　熱きものかな

土工の詩・2

岡本　潤

黙々としてツルを振る男
がうがう声でうたいながらトロを押す男
黙ってるからって淋しがってるんじゃない
ヨタをとばしてても腕はきまっている
仕事はつらいかときかれれば
ナーニと笑うだけだ
仕事をさせる奴とさせられる奴があるという
その根本原理はいわずと知れている
だがメシを食うために土方をしているのは
恥でもなければ誇でもない
生きる当然に生き　当然に働く
その底に溢み流れる熱と仲間への親愛
一人がオーと起ちあがるときは仕事全体が
がっと一度に煮えくりかえる時だ

（本刊出版社刊、岡本潤全詩集より）

第三回復世賞に応募して
いずれ雪原を……

豊川　信雄

二九号、私の書いたものを掲載して下さったのは有難いですけど、書き移しの間違いが二、三個所ありました。悪作でもていねいに書き移して欲しいです。

さて、日野先生の御批評ごもっともだと思います。応募してみようと決心がついた時は、野球はヤクルト、巨人、広島の三巴で目が離せないし、又、競輪のオールスターは始まるで、てんてこまいでした。それで後半のたは大雑把な内容になってしまいました。私は小説のつもりで書いたんですけど、ある程度、学の有る人だったら誰だってこんなもん小説じゃないと言うでしょうね。

もしキヨシ・三枝さんが読んだら"小説と云うよりも、アンコらしからぬ荷作りしたアンコの書いた気違いじみた馬鹿話し"と云うでしょう。中学迄の学歴しかない私には、今の汚れ説はどのような事を書き、どのような書き方をしたものなのか正確には分りませんが、まァーいずれ分るようになるとは思います。

とにかく、私は社会への問題提起みたいなのを取り入れて書くのが好きです。今回も部分的にはいくらか満足している個所もありますが、全体を通して読んでみたら穴があったら入りたいとの恥かしい気持にもなります。

いずれ雪原を晴らす為にも、全体を通して満足出来るのを書き上げてみたいです。

"人夫出し"特集について

私は人夫出しにはほとんど行きませんけど、しょっちゅう人夫出しを頼りに仕事し

なければならない人は可哀想だと思います。

笠野さんを書いていましたように、確かに今の大かたの人夫出しのピンハネはひどすぎると思います。

人夫出し屋には良心がないんだろうか、人を食い物にしているような生き方をして幸福なんだろうか、それで本当に幸福だと云うんでしたら鬼か悪魔だと思います。誰かに退治されるか罰が当るかして暮年は不幸になるでしょうけど、ろくなるのをキをこまねいて待つのは否良的でつまらんと言うものでしょうし、それよりか早くピンハネ率を一割までに抑えた正当な賃金を貰いたいと多くのアンコは望んでいるはずです。

正しい望みだけど、かなえたいと動くのはこの場合、実力の低いアンコ一人々の力ではなにかと障害があるだろうから、これはやはり大きい実力のある行政が立ちあがるべきだと思います。

お詫び

豊川信雄さんへ「書き移しの間違い、がりがりのまずさ、お詫び申し上げます。

寺 開一さんへ「勝手に前半部分を略したこと、題名を短くしたこと、目次及び一二頁において名前を書き間違えたこと、お詫び申し上げます。事後に御了解頂き有難うございました。

佐々木勝造さんへ「詩の後半部分を勝手に削ったことをお詫びいたします。佐々木さんからは、後半を削ったことで常識的なものになってしまった。との言葉がありました。

伝言

森先 弘さんへ「淋せ常 常金五千円を郵振り屋で預っています。連絡して下さい。

読者文壇にも投稿を！

毎号の「読者文壇」にも、詩・小説・生活記録など、どしどし送って下さい。